

# 「小さな画伯たち」の美術館

「みる」から始まる美術教育

ポータブルな世界への第二歩

「あいアイの美術館」の工房に集った画伯たちは、刈ったばかりの稲の穂をよく観察しながら絵を描き始めていました。

かつて、切り絵画家の宮田雅之氏が名付けた「小さな画伯たち」は、今ではすっかり大きく成長し、技術も向上しています。彼らの作品はすでに多くの展覧会や公募展で評価を得て、今ではファンも大勢います。

そんな画伯らを指導する理事長の栗田千恵子館長（以下、館長）が、最初に絵画の指導したのは自閉症の子どもだったといえます。絵を描くことが好きだったその子は、視線を合わすことができず、「こつちを見て」と言っても、見てくれなかったそうです。

物を観察せず、思いにまかせてペンや絵筆を動かすだけでは成長しないと感じた館長は、物を見る」ということから根気よく指導し始めました。その子に「見る」という行動を覚えてもら

おうと、顔の前で風船を破裂させる」と、その瞬間、その子は破裂した風船を凝視したといえます。それ以来、「見て」というと、少しずつ視線を向けるようになったそうです。

見ることができれば、様々なことに気付くことができるようになります。目の色や形が人によって異なり、表情はその時々に変化する。仕草も身に付けるものも人それぞれ。そして、他の人が自分とは違うことに気付きます。これが社会との接点を持つ「大切な一歩」になっているのだらうと思います。作品の制作の第一歩である「見る」という行動は、様々な可能性をもたらすものだと感じました。

あいアイ美術館が行う絵画講座の特徴は、年齢、性別、国籍、障がいのあるなしを問わずに誰でもが参加できるということ。美大生もいれば高齢者もいる。画伯たちは、いろんな人がいる現実の中で制作をしているのです。

「第28回国民文化祭・富士山絵画展」やまなし2013 in 富士吉田」にて、富士吉田市長賞を受賞した伊藤大

貴さんは、富士山を描くのが大好きな作家です。また、富士吉田市議会議員賞を受賞した青木正臣さんは、魚や花などの動植物をカラフルな色と細やかな線で豊かに表現します。当時、公募展の主催者も審査員も授賞式まで、伊藤さんと青木さんが最重度の自閉症であることを知らなかったといえます。

「障がいを持っていないで制作をする」ということは、障がいを言い訳にせず、そして諦めることなく、出来ることは自分です」といことです。そして彼らにとつて、絵を描くことは生きることなのです」と、事業部企画室長の池内巴里さんが話してくれました。

「絵を描く」ということは、本人にとつても、そして周囲の者にも嬉しいことで、楽しいだけで済まされないものです。それは、障がいのあるアーティストであるうが、その他のアーティストであるうが同じことだと思えます。

あいアイ美術館では、東日本大震災や西日本集中豪雨の被災地に絵を届ける「仮設住宅に1枚の絵を」という活動を継続して、絵を手にした人

あいアイ美術館  
(埼玉県川越市)



あいアイ美術館  
(NPO法人あいアイ)  
埼玉県川越市市場北1-17-3  
TEL / 049-277-7872  
<http://ai-ai-art.jp/>

の反応はとても好評だということです。アートは、それを観る人とその評価が委ねられるところがあります。有名な作家が描いた作品であっても、観る人のその時の気持ちに寄り添えるものでなくては、部屋に飾られることはありません。人々がどのような気持ちで作品を観るのかを計り知ることができませんが、画伯たちが表現する作品には、明るく元気をもたらす力があつたようです。

画伯たちが生きる世界は、私たちが生きる同じポータブルでリアルな日常と地続きなのだらうと思えます。



障がいを言い訳にせず、諦めることなく、  
出来ることは自分でするということ。  
彼らにとつて、  
絵を描くことは生きることなのです。



特定非営利活動法人あいアイ  
理事長／美術館館長  
**粟田 千恵子**さん  
あわたちえこ



# Aplusc


アプリュスセー合同会社 代表  
アートディレクター  
**入澤日彩子** (いりさわひさこ)

神戸市出身。大学卒業後、金融機関で  
トレーディング部門や企画、教育部門  
を経験。2016年に展覧会の企画・運  
営やアーティストのマネジメント等  
を行うアプリュスセー合同会社を設立。



アプリュスセー合同会社  
東京都千代田区神田小川町1-8-3 3F  
TEL / 03-6868-4021  
<https://www.apluscj.com/>



 <https://www.instagram.com/aplusc.llc>

新型コロナウイルス感染症に留意し、衛生面には最大限の配慮をしたうえで人的距離を確保して取材を行いました。

